嫁ぐ娘、嫁がぬ娘へ

山田太一 編

こころの本

嫁ぐ娘、嫁がぬ娘へ

山田太一 編

江苏工业学院图书馆
藏书章

筑摩書房

嫁ぐ娘、嫁がぬ娘へ
一九九七年六月二十日　初版第一刷発行

編　者　山田太一
発行者　柏原成光
発行所　筑摩書房
〒一一一　東京都台東区蔵前二―五―三
振替　東京六―四一二三

印　刷　明和印刷
製　本　和田製本

©山田太一ほか　1997　Printed in Japan
ISBN 4-480-81413-2　C0095
ご注文・お問い合わせ、及び乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
大宮市櫛引町二―六〇四　筑摩書房サービスセンター
〒三三一　TEL 048-651-0053

「こころの本」シンボルマーク　五郎丸正信

もくじ

人生は誰も教えられないけれど　山田太一　3
＊
ケッコン行進曲　関根　弘　17
結婚したっていいんだよ　橋本　治　23
男女均等・上級講座　宮迫千鶴　33
結婚とは彼の過去のすべての女に勝った証しです　柴門ふみ　45
男にとっての結婚　富岡多恵子　51
結婚　新川和江　63
＊
結婚式　群ようこ　67
父親の涙　吉村　昭　91
結婚の申し込みがきたときには　内海隆一郎　97

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

花嫁　石垣りん　103
結婚雑談　幸田　文　107
私自身の結婚問題　和田かおる　121
お見合い話と私たちのユウウツ　白石公子　131
＊
なおも、男・女などをめぐって　金子光晴　139
夫婦の理解／幻滅　福田恆存　149
愛をめぐる人生模様2　形を変えること　大庭みな子　153
「（お）もろい夫婦」から　平田俊子　159
愛する男は、自分で守る　時実新子　169
＊
結婚を迷う私たち　俵　万智　177

平凡の二文字を嫌ひ髪洗ふ　黛まどか　187
私の結婚の条件　藤堂志津子　195
シングル・ライフ――さびしさ、そして喜び　海老坂　武　215
わがまま男とわがまま女の理想的結婚　水上洋子　223

本文カット　伊藤友宣

嫁ぐ娘、嫁がぬ娘へ

人生は誰も教えられないけれど

山田太一

私は脚本を書く仕事をしている。

すると、ひとの身にならなくてはいけない。

といっても、ひとの身になって優しくなったとか親切だとかいうのでは、まったくない。私は格別優しくも親切でもない。ただ仕事上の必要として、どの程度できるかはともかく、登場人物それぞれの身に一応ならなければ台詞が出て来ない、という立場にある。

で、誰にも愛されていない老婆になったり、保育園で泣きやまない三歳児になったり、大久保利通になったり、部長になったかと思うと、平社員にあたられている下請けの営業になったり、浮気な女房になったり、痴漢になったり、スーパーモデルにも

アイルランド生まれのアメリカ人になったりもする。

「毎日そんなことをしていたら、ほんとに人の心がお分りになるんでしょうね」なんてお愛想をいってくれる人がいる。

ところがそういうことはない。勝手につくった人物の心の動きだから、現実の人間とはたいして関係がない。家人からは「ほんとにひとの気持が分らないんだから」と呪われている。自分ではそれほどでもないと、おずおずとは思うのだけれど、誰しも自分については目が曇るから、家人のいう通りなのだろう。

娘が二人いる。嫁いだ娘と嫁がぬ娘である。

二人について考える時も、日頃の癖が出てしまう。

嫁がぬ娘についてあれこれ考えると、「結婚がなんだ」という気持にどんどんなって行く。現実の娘は、いまのところ結婚していないだけのことだから、そこまでは思っていないに決まっているのだが、こっちは現実かまわず過剰に「ひとの身になる」癖がついているから、たちまち「結婚しない方が幸せ」というラインで思いがふくらんで行く。

「かつては笑いがあった。いまの夫妻にあるのは沈黙と冷淡である」というような文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

章を目にすると「夫婦なんてそんなもんよ」となんだか嬉しい。

「一世一代の世紀の恋」をして、半年で別れてしまった夫妻のことを中村紘子さんが書いている（「アルゼンチンまでもぐりたい」）。結婚してから夫の大好物が鮭の焼けこげた皮だと分ったのだそうである。妻は「まるでヘビの脱け殻みたいで箸で触るのもイヤ」なのに、夫は御飯粒の残った茶碗に入れてお茶を注いでクチャクチャにかき廻し「正視するのも耐え難いほど汚らしくなった」それを「満足気にすすったりしゃぶったりする。彼女は自分でも予期しなかったほどの激しい嫌悪感に、思わず身震いしてしまった」そうである。

結婚相手が、実は思ってもいなかった存在だと分るのは怖い。ところがどんな結婚だって、ほとんど必ずそういう意外性はあるのだからおそろしい。多くはのぼせているうちに知り、ひそかに歎きながらも、若さや性欲に助けられてなんとかやって行くのだけれど、それで配偶者の実体が分ったつもりでいると、そうはいかない。中年になって、それまで隠していたおぞましいものが急に浮上したりするのである。死ぬまで隠していた秘密などというものもある。そんなことはうちみたいな平凡な夫婦にはない、と思っていると、とんでもない。人間は分らない。誰がなにを秘めているか知

れやしない。そういう分らない他人と一緒に暮らそうというのは、ほとんど無謀というか無神経というか怖いもの知らずなことで、他者のエゴ、性向、不潔に多少の想像力があれば、結婚などめったに出来るものではないはずなのである。

その上、結婚で「予期しなかった」実体が浮上するのは、配偶者だけではない。他人と暮らさなければ知らずにすんだ自分の怖さにおどろいたりする。姑を殺してやろうか、と本気で思っていたり。

それに比べて、独り暮らしの女性同士の、少し老いて来た頃の関係は、なんといい味だろう。

岸田今日子さんのパリ紀行（「スリはするどこでする」）を読んでいたら、パリで加藤治子さんが昨夜着いたと知るところがある。二大女優は共に（事情はちがうが）いまは結婚していらっしゃらない。

岸田さんが地下鉄で加藤さんのホテルへ行く。加藤さんは「一人で来て偉いねえ」と賞める。地下鉄どころか、深夜散歩をして男にキスをせまられた、と岸田さんが少し自慢気にいうと「だめよ、そんな」と加藤さんははらはらする。

「わたしがセーヌ川に浮んだら、娘を頼むわね」と岸田さんが図にのると、加藤さん

は柔らかく真顔になっていう。

「わたしが死んだら後のことは今日子に頼むって、遺言に書いてあるのよ」

男はなかなかこんなことはいえない。ひとりで格好つけて孤独死してしまう。

女はいい。独りでもいい。こういう友だちをどしどしつくって幸せになれる。ああ、よかったとほっとしてしまう。無能でむさくるしい男などいない方が、どれだけいいか。ハムレットの台詞が頭を横切る。

「結婚などこの世から消えてしまえ。もうしてしまったものは仕方がない。ほかのものは、いいか、このままひとりでいることだ」

嫁いだほうの娘のことを考えると、どうしても結婚がいいようなことが浮んで来る。現実には結婚を悪くいうのは結婚している人間たちかも知れないのに、非現実にまた「結婚してよかったじゃないか」という方向にひきずられてしまう。とはいえ、こっちのほうは私も結婚しているので、そう明解に礼賛というわけにはいかない。ふりかえると溜息が出る。それほど揉めていなくても、大変である。

小さい子供がいる頃の大半は寝不足で気を許せないし、三人もいると（息子も一人

いる）次々となにか起るし、うちで書いている仕事だからどうしても邪魔されるし、二、三日でいいから夫婦二人になれたらどんなにいいかと思ったりして、時がたち、夫婦二人にいくらでもなれるようになってみると、あの頃そんなことを思えたのは、子供たちが夫婦で向き合う時間を与えなかったからこそだったと思い知ったりして、依然として大変なのである。

もっとも結婚はあれこれの局面があるので、短文で要約しようとすると、書くたびに色合いが変って、ほとんど偶然の感慨みたいになってしまう。

時にはいい思い出ばかりが浮んで、神か仏か知らないが、とにかく「おかげさまだったなあ」と手を合せたくなったりもするのである。しかし、そんな感慨をひとさまが読む文章で強調はできないから、どうしても「大変な側面」が前に出てしまう。

しかし、「結婚も悪くない」のである。あたりまえだが「悪くない」結婚もあるのである。

どうも歯切れが悪いが、もう少し先へ進もう。

せんだって、筒井ともみさんが、新聞のコラムで友だちのことを書いていた（「女友だち語録」）。独身のA子さんが妊娠して呟いた。「子供ができたからって、男まで

引き受けるのはうっとうしいな。子供は未来につながっているけど、男は過去形だもの」

やはり独身のB子さんは、二人の恋人がいるワーカホリックである。恋人のひとりが、妻子と別れて老後は彼女と暮らしたいといい出した。「恋人になったぐらいで老後はよろしくなんて甘ったれたこと考えてほしくないわ」B子さんは、近々その恋人と別れるつもりらしい、というのである。

男は型なしである。全然あてにされていない。それどころか、うるさがられている。どうやら女は（少なくともその一部は）深々と男を諦らめているらしい。無能で、見栄っぱりで、縄張りを気にして、人見知りで、甘ったれで、こんな社会をつくって、いざとなれば戦争をやる奴らなど、うちへ入れたくない、と思うのも無理はない。

気持は分る。そういわれても仕方がない。

しかし、随分強いなあ、と少し鼻白らまないでもない。

仮にA子さんとB子さんの言葉を男がいったら、どうだろうか？「子供は欲しいけど、腹を借りた女はいらない」とか「恋人になったぐらいで老後はよろしくなんて甘ったれたことを考えるなよ」とかいったら、相当嫌な奴ではないだろうか？

まだまだ男社会だから、女性のいい分は嫌味が薄いけれど、少しいたましい気がしないでもない。結局は男のせいとはいえ、そんなに強くなくてもいいんじゃないだろうか？

男女の関係がそんなに一方的だとしたら、つまり男がただ甘える存在、引受けなければならないうっとうしい存在だとしたら、それはそんな男を選んだ女が悪いか、男から得るものを認めたくないタイプか、人間の弱さを知らない若さの言じゃないかなあ、と思ってしまう。男と女の関係は、随分サバサバして来たとはいえ、そんなに簡単だろうか、うまれて来る子供と両親の関係もそう勇ましくわり切っていいものだろうか、とつい古風なことを考えてしまう。

それから、いやいやこの勇ましさは、恋人同士のせいかもしれないと思い返した。相手が恋人なら「ああもう嫌」と思えば、すぐ裁ける。明日から逢わないことも可能である。結婚をしていたら、そう簡単にはいかない。もう少し考える。子供がいれば、もっと考える。いい合いもする。それでただ更にうんざりしただけという場合もあるにきまっているけれど、二人の関係がそんなに簡単ではないことに気がついたりするかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com